

令和5年度 東京都立荻窪高等学校 学校経営報告

本校は、昼夜間定時制高校として、三部制、単位制の特色を生かし他校では実現できない多様な学びの場を提供することで、個に応じた丁寧な教育活動を行っている。今年度は新型コロナウイルス感染症も5類に移行したことで、通常のエデュケーション活動を取り戻すべく取り組んできた。また、様々な生徒が在籍する中で、「誰も置き去りにしない荻窪高校」を目指し「一人一人の生徒に希望を持たせ、一人一人の努力を希望の実現につなげる」ことをコンセプトに一人一人の生徒を大切にしてきた。

学習指導においては、授業改善の取り組みとして「面白い・分かる・もっと受けたい授業」、生徒が積極的に取り組もうとする授業を目指し、生徒の声を聞きながら教員同士、授業力向上に努めた。生活指導においては、生徒一人一人の様々な状況に配慮した指導を進めるとともに、規定の見直しにも取り組み次年度も継続する。進路指導については、多様化が進む進路希望に対して、個々へのより丁寧な対応を行った。また、組織して3年目になる総合支援部を中心に、様々な課題を持つ生徒への配慮や支援を行った。外国ルーツの生徒への日本語教育や発達障害のある生徒への通級による指導、不登校生徒への対応をはじめ、生徒が学校生活を送る上での課題を改善すべく取り組んだ。

これらの取り組みは、一定の成果を上げることができた。次年度以降も様々な課題に向き合いながら、改善を重ね、取り組んでいきたい。

今年度の取組目標と方策に対する自己評価、課題及び改善策

①学習指導

＜重点目標＞

ア スクール・ポリシーを実現するための指導方法を具体的に研究し、実践する。

イ 「面白い・分かる・もっと受けたい授業」で学習意欲を引き出し、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業実践により積極的に授業に参加する姿勢を育成する。

ウ 生徒の学力とその変容を把握し、「生徒を伸ばしているか」を常に検証し、指導改善につなげていく。また、生徒自身が客観的に自分の学力を把握し自己肯定感を持たせるとともに、進路実現に向けた課題を明確にできるようにする。授業毎の目標設定の明確化や外部模試、検定試験等の活用を奨励する。

エ 登校が不安定な生徒も含めて学習の遅れがちな生徒への授業を補う指導の工夫を図る。

オ 意欲のある生徒の興味関心に応じて主体的な学びの支援を充実させる。

カ ICTの活用を推進し、効率的、効果的な学習活動につなげる。

＜方策＞

ア スクール・ポリシーを実現するための指導方法を具体的に研究し、本校の年間授業時数の実態を踏まえた年間指導計画を策定する。

イ 「面白い・分かる・もっと受けたい授業」を実現するために、授業力向上委員会を中心とした授業改善研究、ICTを活用しオンデマンド方式も取り入れた相互授業研究、生徒による授業評価を実施し、授業改善に生かす。

ウ 定期考査を活用した学力調査や基礎学力診断等により学力の変容を把握して、進路指導とともに学習指導の改善にもつなげる。

エ 個別課題の提示・補習補講等や校内別室指導推進事業における学習サポート等によって学習の遅れの支援を図る。

オ 「荻探」「Scientific Inquiry Program (SIP) 拠点校事業」等の活用により意欲のある生徒の主体的な学びの支援を充実させる。

カ 1年次の一人1台端末の活用を進めるとともに、2年次以上についても同等のICT活用を進める。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 各教科の創意工夫による観点別評価を実施し、学習が進まない生徒へも丁寧に時間をかけて指導した。その結果、履修が認定された生徒に占める修得の割合は99%を超えている。ただし、未履修率が30%と高く、これは今後の課題である。

イ 授業力向上委員会による研修会を2回実施、理数教育推進事業(SIP)による研修会を1回実施、授業力向上委員会通信を5編発行、公開授業8回、研究授業17回実施した。特定の教員だけでなく、広く教員間で授業ノウハウの共有を進めることが課題である。生徒による授業評価の回答数を大きく改善した。(1回目 218→2回目 371)。また、結果については、全体的傾向について全教員で共有するとともに、個別の結果を各教員に返すことで、より生徒の実態を踏まえた授業改善を図った。

ウ 研修会において、印象の強い授業とペーパーテストの成績との相関関係について検証した。学力スタンダード事業において、定期考査を活用した学力調査を実施した。今後は、その結果を進路指導と連携させる等、さらに有機的に活用していくことが課題である。

エ 各教科で個別に学習フォローをおこなった。その結果が、アの修得率につながっている。また、校内別室指導推進事業で使用する学習動画を、実技科目を除くすべてのコアタイム共通科目で整備した。実技科目における学修サポートの方法については更なる検討が必要である。また、この教材を利用者の学習につなげる支援方法についても検討が必要である。

オ 荻探参加者1名の単位認定をした。また、SIPについては講演会・講義への生徒参加のべ 30 名、フィールドワークへの参加者のべ 19 人であった。SIPは 2 年間の事業であるが、理系への関心が必ずしも高くない本校においては、1 年目として多くの生徒が参加したといえる。

カ オンライン学習デーを中心にすべての授業で ICT の活用がおこなわれた。また、かつては紙で配布していたプリント類をオンライン配信するなどの ICT 活用によるペーパーレスの推進により、授業教材等の即時共有・紛失防止が学習支援となっている。

【学校評価アンケート結果より】

授業について

① 「小中学校での学習内容を再確認したり、独自のプリントやスライド教材を用意したりするなど、教科書の内容が深く着実に身につくように創意工夫している授業が多い。」という内容の質問に対して 74.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「私は、小中学校での学習内容を再確認したり、独自のプリントやスライド教材を用意したりするなど、教科書の内容が深く着実に身につくように授業の創意工夫をしている。」という聞き方をしており、95.8%の教員が肯定的な回答をしている。教員の創意工夫を生徒も実感として感じていると言えそうである。

保護者アンケートでは「小中学校での学習内容を再確認したり、独自のプリントやスライド教材を用意したりするなど、教科書の内容が深く着実に身につくように創意工夫している授業が多いと感じている。」という内容の質問に対して 75%の保護者が肯定的な回答をしている。

② 「興味・関心、自信や疑問を引き出してくれるため、さらに発展的に学習を進めたい授業が多い。」という内容の質問に対して 62.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「私は、興味・関心、自信や疑問を引き出すことで、さらに発展的に学習を進めたい授業に取り組んでいる。」という聞き方をしており、97.9%の教員が肯定的な回答をしている。生徒の肯定的な回答の割合と比較すると教員の思いがまだ生徒に十分に理解されていないと言えそうである。次の学びに誘うための工夫がもう一工夫必要だと言えるだろう。保護者アンケートでは「子どもが、興味・関心、自信や疑問を引き出してもらえて、発展的な学習を進めている授業が多いようだ。」という内容の質問に対して 74.2%の保護者が肯定的な回答をしている。

③ 「本校に入学してから、勉強の楽しさや予習・復習の大切さを実感し、学習に取り組む姿勢が向上した。」という内容の質問に対して 63.59%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「生徒たちは、本校に入学してから、勉強の楽しさや予習・復習の大切さを実感し、学習に取り組む姿勢が向上しつつある。」という聞き方をしており、64.6%の教員が肯定的な回答をしている。これは生徒の回答の割合と比較しても教員も生徒も同じような実感を得ていると言えそうである。

保護者アンケートでは「本校に入学してから、勉強の楽しさや予習・復習の大切さを実感したらしく、学習に取り組む姿勢が向上したようだ。」という内容の質問に対して 62.5%の保護者が肯定的な回答をしている。

④ 「手軽に使えるようになったパソコンやスマホが、効果的な学習活動を促すよう授業で活用されている。」という内容の質問に対して 60.3%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「スマートスクールプロジェクトによってパソコンやスマホが手軽に使えるようになったが、それらは効果的な学習活動を促すことに役立つものとなっている。」という聞き方をしており、66%の教員が肯定的な回答をしている。これも生徒と教員が同じようなことを実感として感じていると言えそうである。

保護者アンケートでは「パソコンやスマホが手軽に使えるようになって、授業で活用されているようだ。」という内容の質問に対して 84.4%の保護者が肯定的な回答をしている。

②進路指導

〈重点目標〉

ア 系統的なキャリア教育を実施し、早い段階から進路について意識を深める。

イ 全ての卒業生の進路決定を目指し、少なくとも進路決定率を 8 割とする。

ウ 多くの情報を収集し、それらを活用する能力や表現力、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーション能力を培い、自己理解を深め、自らの将来を考える力、進路を切り拓く力を育む。

〈方策〉

ア 「進路ノート」を活用し、入学時から系統的なキャリア教育を実践する。進路行事等を通して視野を広げ進路について考える力を養う。また、基礎学力診断等を有効に活用することによって学力の変容を把握して、進路指導に活かす。

イ 進路指導部と各卒業年次が中心となり総合支援部、自立支援チーム等と連携し、かつ外部人材も活用した組織的な進路指導により、進路決定率の向上を図る。特に、課題のある生徒、日本語を母語としない生徒の進路決定は YSW や関係機関との連携、進路開拓など必要な措置を講ずる。また、卒業時の進路未決定生徒や退学生徒への継続支援を計画的に実施する。

ウ 資格取得を奨励する。また、インターンシップや体験活動等の進路行事及び面接指導等を充実させることで自らの将来を考える力、進路を切り拓く力を育む。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 進路ノートを電子化し、進路に関わる資料やプログラムで得た学びの記録・蓄積・進路活動での活用を図つ

た。卒業年次(3・4年次)を中心に、進路アンケートの実施 2 回、分野別ガイダンスの実施、基礎学力診断は事前に one week trial を配布した上で「基礎力診断テスト」(ベネッセ)を 4 月に実施し、活用のための教員研修を実施した。人間と社会／総合探究の時間における、キャリア教育推進委員会を通じた系統的なキャリア教育の全体計画の立案をスタートした。今後徐々に「荻窪高校の探究」として確立を目指す。課題は、進路ファイルは使用についての年次への周知が不十分だったため、あまり定着しなかったこと。基礎力診断では、事後の活用向上を狙い研修を行ったが、進路部が担任の活用の状況を把握しにくかった。結果と事後の指導の連動のしくみの構築が必要である。次年度は早い段階からの進路意識向上を目指し、①全年次対象の「進路フェア」の企画、②1 年次からの進路アンケートおよびポートフォリオの導入、③基礎学力診断実施後に連動課題を配信するなど、面談等への活用が円滑にできるシステムの導入を検討する。

イ 今年度の全体の達成率は72%と、昨年度の77%をも下回った。就職希望者・進学希望者ともに、進路指導部がおもに関わった生徒に関してはほぼ全員進路先を決定して卒業しているが、コロナ措置の影響を強く受けた年次でもあり、欠席が多くギリギリで卒業に至った生徒については「とにかく卒業する」こと自体が目標となり、進路を検討する余裕がなかった状況があった。外国籍生徒のほとんどが専門学校への進学を志望。東京都国際教育研究協議会が主催する「外国につながる生徒のための進学ガイダンス」(7 月)引率担任とともに専門学校訪問・面談(10 月)するなどの進路支援を実施した。結果、外国籍生徒の3年次全員が希望進学先に決定した。発達に課題のある生徒には、ケース会議や三者面談で進路指導部・総合支援部・担任が課題を共有した。面談した保護者に対しては、卒業後の本校での就職相談についても案内し、一定の信頼を得られた。今後は、進路決定率改善のために、学習や学校生活の意義を問い直す指導を、組織を挙げて考えなければならない。次年度は「進路フェア」参加を導入し、入学 1 年目からの早い段階で、自己理解と進路実現を意識できるプログラムや行事を実施する。「外国一進学ガイダンス」への参加は次年度も継続する。発達に課題のある生徒への支援については、面談自体は保護者が納得する形で終了しても、進路決定には至らないケースもあった。卒業後の就職希望生徒への方策として、杉並区就労支援センターとの連携体制を構築する必要がある。

ウ 英検・漢検・文章検定・ニュース検定など、多くの生徒が取り組み成果を得た。インターンシップは 地域との交流・連携を意識し、コロナ後再開し、近隣地域の3つの企業において実施することができた。実習期間中は実習先の方々に厚いご支援をいただき全員が達成、生徒の満足度も高かった。事後指導では実習の成果発表を教職員にプレゼンし、評価を得ることができた。進路行事として、卒業年次に対して、総合的な探究の時間および LHR を使い、分野別進路ガイダンス、面接指導、志望理由書の書き方講座、社会人講師に在り方生き方ワーク(一般名称)など約20のプログラムを実施した。就職希望者に対してはハローワークと密な連携をとり、定期的に指導を実施した。また、就職決定者全員への事後指導も実施した。進学希望者に対しては、指定校推薦を中心に、模擬面接や志望理由書・論文の指導を個別に行ったほか、必要に応じて三者面談でアドバイスするなど指導を充実させた。インターンシップは実習先を増やし、さらに多くの生徒が地域社会の中で学ぶ機会を増やす。次年度は卒業生が少ない見込みではあるが、キャリア教育委員会を通じて、年次・分掌が協力して参画する進路行事や分掌プログラムの質をさらに向上させる。キャリア教育のテーマに沿った系統的な計画・実施・修正サイクルを今後数年継続することにより、「荻窪高校の探究学習」として確立させる。特に次年度からは卒業年次だけでなく、早い段階での進路意識の醸成を進路指導の重点目標とし、進路指導部が学びや学校生活の意義について継続して発信できるようにしていきたい。

【学校評価アンケート結果より】

進路指導について

- ① 「本校の進路指導は、外部講師の講話などを活用し、卒業後の自立を目指した進路指導が、充実していて良いと感じる。」という内容の質問に対して 71.6%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校の進路指導は、外部講師の講話などを活用し、卒業後の自立を目指した進路指導が、充実していて良いと感じる。」という聞き方をしており、77.6%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校の進路指導は、外部講師の講話などを活用し、卒業後の自立を目指した進路指導が、充実していて良いと感じる。」という内容の質問に対して 77.4%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ② 「本校の進路指導では、生徒ひとりひとりの進路について、卒業後の自立を目指した親身な指導を行っている。」という内容の質問に対して 73.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校の進路指導では、生徒ひとりひとりの進路について、卒業後の自立を目指した親身な指導を行っている。」という聞き方をしており、83.7%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校の進路指導では、生徒ひとりひとりの進路について、卒業後の自立を目指した親身な指導を行っている。」という内容の質問に対して 74.2%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ③ 「本校の総合的な探究の時間は進路学習に役立っている。」という内容の質問に対して 67.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校の総合的な探究の時間は生徒の進路学習に役立っている。」という聞き方をしており、55.1%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校の総合的な探究の時間は子どもの進路学習に役立っている。」という内容の質問に対して 63.3%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ④ 「本校が掲示や Teams等で知らせてくれる進路情報は、自分の適切な進路選択に役立っている。」という内容の質問に対して 62.7%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校が掲示や Teams等で

知らせてくれる進路情報は、生徒の適切な進路選択に役立っている。」という聞き方をしており、67.4%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校が掲示や Teams等で知らせてくれる進路情報は、子どもの適切な進路選択に役立っている。」という内容の質問に対して 74.2%の保護者が肯定的な回答をしている。

③生活指導

- ア 都立高校生活指導指針及び本校の生活指導規定に基づき、基本的生活習慣を身に付けさせる指導、規範意識を育てる指導、社会性を育む育成を「シティズンシップの育成」として実施していくことで、生徒が自律的に「秩序ある学校生活」を創造できるようにする。
- イ 自他の生命を尊重する精神や意識を育て、自他の生命の大切さを認識させ、いじめを防止し、安心で安全な秩序ある学校生活を送らせる。
- ウ 問題行動には適切に指導方針を決定し、「不適切な行為を反省させ、再発防止を図る」指導にとどまらず、「望ましい行動を選択する力の育成」に主眼を置いた指導の充実を目指していく。
- エ 防災教育を適切に実施し、生徒の防災意識を高める。

＜重点目標と方策＞

- ア 授業規律指導、遅刻指導、頭髪指導、身だしなみ指導、マナー指導、挨拶指導、清掃指導等を継続する上で、全教員が統一の基準で指導することを更に徹底する。取組週間を設ける等により、生徒にも学校生活上の課題を理解させ、秩序ある荻窪の学校生活を創造するように取り組ませる。生活規定については学校内外の様々な意見を聞き、必要に応じて見直すなど適切に運用する。
- イ 警察等の外部機関とも連携しセーフティ教室等を実施し生命の大切さを学ばせる。また、いじめ防止について校内研修を行い生徒にも適切に指導をする。
- ウ 特別指導の流れに「個に応じた指導」を適切に位置付けていく。その際、必要に応じて生活指導部と総合支援部や SC、YSW が連携する。また、「望ましい行動を選択する力の育成」に主眼を置いた指導計画を検討し、学校全体で共有し実施していく。
- エ 消防署や自衛隊とも連携して様々な状況を想定した防災訓練を実施することで、生徒の防災意識を高める。

【自己評価と課題及び改善策】

- ア 生活指導指針及び生活指導規定を踏まえて、「居心地の良い学校」を目指して丁寧な指導を行った。シティズンシップの育成や生徒の自律的な活動については、生徒会役員を中心に学校の在り方を考えるアンケートの実施や、生徒総会での議決、生徒会役員選挙の充実などを生活指導部で支援した。
頭髪指導については、定期考査に合わせて指導を強化するなどしたが、生活指導規定の見直しも並行して行っていたため徹底が難しかった。また、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行し、新たな学校運営を進める中で、数年ぶりの学校行事の運営や、教員の異動などにより、全教員が統一の基準で指導することが、不十分な点が目立った。生活指導規定の見直しについては、2 度にわたる校内研修会の開催や、生徒会からの要望、保護者や学校運営連絡協議会からの意見を反映して適切に行った。特に頭髪指導については令和 7 年度に向けて令和 6 年度にさらに議論を加速させる。

- イ 式典での講話やいじめ対策委員会の決定に基づく個別指導、特別指導における登校謹慎などを通して生命尊重の考えに基づく指導を行った。また、スタントマンによる交通安全教室を行うなど、生徒の関心を引く行事の在り方の検討を行った。いじめ防止については広く生徒支援・理解という観点で総合支援部と連携することができた。

- ウ 特別指導の流れに、生活指導部と総合支援部や SC、YSW が連携し、面談の結果から WISC 検査及び、発達段階の見地からの指導を行った。「指導方針」の中に支援的な視点を加えることによって、多様性に対応できる指導ができた。今後とも、生徒への指導＝生活指導部ではなく、組織として取り組んでいくことが必要である。特別指導における「誓約書」を「学校生活の目標」と改定し、生徒が前向きに学校生活を送れるような具体的に分かりやすく実効性を期待できる指導方針をすすめた。

支援方針会議に生活指導主任も参加することで、校内の問題行動を多面的にとらえるなどして、問題行動における本人の特性や家庭状況等を踏まえた個に応じた指導を一層進めた。今後も「学校生活の目標」や日誌をより有効な方向へ、必要に応じて改定したり、指導プログラムの見直しなどを通して、未来志向の指導をすすめていく。

- エ 年 4 回の避難訓練において、水害時における避難方法を変更するとともに、各教室で地域に根差した水害防止の授業を行った。4 年ぶりに桃二小震災救援所訓練に参加し、地域と連携した防災意識の向上を図ることができた。また、自衛隊と連携した防災講話、消防署と連携した震災救援所訓練における消火訓練や救急救命訓練などを行った。

【学校評価アンケート結果より】

生活指導について

- ① 「本校は、挨拶・頭髪・遅刻などの指導にあたって、規律を守る大切さを理解・納得がいくように説明してくれている。」という内容の質問に対して 54.3%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「私は、挨拶・頭髪・遅刻などの指導にあたって、規律を守る大切さを理解・納得がいくように説明している。」という聞き方をし

ており、77.6%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「先生方は、挨拶・頭髪・遅刻などの指導にあたって、規律を守る大切さを理解・納得がいくよう説明しているようだ。」という内容の質問に対して67.7%の保護者が肯定的な回答をしている。

② 「本校は、セーフティ教室その他の防災教育をいろいろ行うことで、生徒の安全に力を入れている。」という内容の質問に対して79.7%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校は、セーフティ教室その他の防災教育をいろいろ行うことで、生徒の安全に力を入れている。」という聞き方をしており、85.7%の教員が肯定的な回答をしている。生徒の肯定的な割合をみても本校の防災教育を生徒も十分に受け止めていると言えそうである。保護者アンケートでは「学校は、セーフティ教室その他の防災教育を推進し、生徒の安全に力を入れている。」という内容の質問に対して93.8%の保護者が肯定的な回答をしている。

③ 「学校は芸術鑑賞教室、文化祭など工夫した行事を組んでいて、学校生活に幅広い魅力を作り出している。」という内容の質問に対して77.8%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「学校は芸術鑑賞教室や文化祭などの工夫した行事を組んでいて、学校生活に幅広い魅力を作り出している。」という聞き方をしており、89.6%の教員が肯定的な回答をしている。本校では12月に芸術鑑賞教室として劇団四季の「アラジン」を鑑賞、また1月に「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」として「さらば青春の光」を招いてモルックを一緒に行うというイベントを行った。生徒の肯定的な割合と乖離があるが、芸術鑑賞教室については生活指導部がアンケートを採っている。保護者アンケートでは「学校は芸術鑑賞教室 文化祭などの工夫した行事を組んで、学校生活に幅広い魅力を作り出している。」という内容の質問に対して96.9%の保護者が肯定的な回答をしている。

④ 「本校は、生徒の多くが通学時でも校内生活でも他者に敬意を払いマナーを守っている。」という内容の質問に対して56.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校の生徒の多くは、通学時でも校内生活でも他者に敬意を払いマナーを守って生活している。」という聞き方をしており、36.7%の教員が肯定的な回答をしている。生徒の肯定的な回答割合も半分程度、また教員の肯定的な回答割合も低く、改善への検討が必要である。保護者アンケートでは「本校は、生徒の多くが通学時でも校内生活でも他者に敬意を払いマナーを守っていると思う。」という内容の質問に対して77.4%の保護者が肯定的な回答をしている。

④教育相談・自立支援

＜重点目標＞

ア SC、YSW・自立支援チーム、学校精神科医との効果的な連携、情報共有を更に充実させていくために、情報共有、ケース会議を効果的に行い、その成果も学校全体で共有し、生徒理解力を向上させる。

イ 多面的な生徒理解、個に応じた指導、複合的な支援を可能とする関係機関との連携により、すべての教育活動に「支援」の観点と取組を広げていく。

ウ 東京都特別支援教育推進計画(第二期)第二次実施計画を踏まえ「総合支援部」を中心に、個別に支援を必要とする生徒を確実に把握し適切に対応していく。

エ いじめの未然防止、早期発見と解決に向けた適切な対応を図る。

＜方策＞

ア 生徒情報の共有と支援方針を確認する定例会を週時程に位置付けて定期的実施する。また、全教員参加で課題のある生徒への対応等の情報を共有する研修会を年3回実施する。

イ 不登校生徒へのアプローチを重点課題とし、本校入学前の不登校経験を越えて「通学」を選択し入学した生徒、入学後に長期欠席の傾向が現れ始めた生徒への支援策について、校内別室指導推進事業も踏まえて具体化し実施する。通級による指導や日本語指導についても対象者に対して適切に実施する。

ウ 担任や保健室、SC、YSW等への生徒・保護者からの相談やアンケート等の様々な機会を通して生徒の状況を把握する。総合支援部が中心となって、個別に必要な支援方針を検討し、YSWとの連携、日本語の指導、通級による指導、学校外における学修の単位認定等の外部機関との連携も含めて学校全体として効果的な支援体制を構築する。

エ 3回のアンケート及び面談等を実施し、様々なSOSの出し方を生徒に示すとともに、いじめの未然防止、早期発見と解決に向け適切に対応する。

【自己評価と課題及び改善策】

ア ファイルサーバーに生徒情報を書き込むエクセルブックを置き、そこに生徒の状況を記録し各教員が情報にアクセスすることができるようにした。書き込み量が大量になるがデータベース的な機能も持たせることで情報共有の効率化を進めた。さらに、毎週定例の支援方針会議を行い、その情報について必要に応じて支援方針について検討し、その成果物として不登校対応の資料を完成させた。支援方針会議は、26回実施した。また、毎学期の全体教員向けの全体ケース会は「特別な支援」、「外部連携」、「不登校対応」とテーマをもって実施した。今年度も、近隣の子ども食堂に協力して、校内でフードパントリーを学期に2～3回実施した。多くの生徒が参加したが、その中には少数ではあるが、何らかの支援や配慮が必要な者もいて、そういった生徒への個別の対応につなげることができた。

イ 不登校生徒への対応は、生徒の状況に応じて定期または不定期の連絡や家庭訪問等を行ったり、支援方針会議で一定の統一的な対応を検討したりするなどして取り組んだ。本年度より実施された校内別室指導推進事業との連携をし、別室登校を継続している生徒も出現しているが、決め手となるような改善策は見いだせない

のが実情である。今後、さらに増えることも予想されるので不登校生徒への対応については、引き続き検討する必要がある。

ウ 通級による指導では、今年度は20名の生徒が受講した。連携機関であるGrow-Sから派遣を受けるなどして高校通級支援員と連携し適切に実施することができた。また、日本語支援教育は公文式を活用した学習や日本語能力試験(JLPT)合格に向けた学習等に、日本語指導外部人材活用事業(グローバル人材育成部)やボランティアによる外部人材の協力も得て取り組んだ。よく参加した生徒については、JLPTでN1に合格するなどの成果を得られた。一方で、そもそも日本語習得に対する意欲を高めることは課題として残っている。また、充実した内容で実施したため、予算面ではかなり無理をする状況となっており、今後は、効率的な運営を図る必要がある。

エ 3回のいじめに関するアンケートでは、いじめに限らず、気になることや困っていることがある場合に回答できるようにして、該当生徒全員に内容に応じて担当教員や担任、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが面談を行い、必要に応じて次の対応を行うことで、早期に問題の芽を摘むようにした。また、いじめ対策委員会を複数ケースにおいて開催し、早期対応や校内周知を図ることができた。

【学校評価アンケート結果より】

支援活動について

- ① 「本校は、生徒が自分や友人関係の悩みについて、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して76.9%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校は、生徒が自分や友人関係の悩みについて学校に気軽に相談して支援を受けられる態勢をつくっている。」という聞き方をしており、98%の教員が肯定的な回答をしている。この質問項目の「雰囲気」は教員からみれば教員が作り出している「体勢」である。教員は相談の場面を自分なりに創出しており、生徒をいかにその場面で相談に載せていくかというカウンセリング技術のような訓練の必要性として読むことができる項目である。保護者アンケートでは「本校は、自分や友人関係の悩みについて学校に気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して87.1%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ② 「本校は、生徒が家庭内での悩みについて、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して74.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校は、生徒が家庭内の悩みについて学校に気軽に相談して支援を受けられる雰囲気をつくっている。」という聞き方をしており、95.6%の教員が肯定的な回答をしている。この項目も生徒の肯定的割合と教員の肯定的割合に乖離があるが、前項目同様にカウンセリング技術のような訓練の必要性として読むことができる項目である。保護者アンケートでは「本校は、家庭内の悩みについて生徒が学校に気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がある。」という内容の質問に対して80.7%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ③ 「本校は生徒に、スクールカウンセラー(SC)やユースソーシャルワーカー(YSW)がどんな支援をしてくれるか理解させ、必要ときに役立てるよう促している。」という内容の質問に対して65.6%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校は、生徒が暮らしや健康について、気軽に相談して支援を受けられる雰囲気がつくれている。」という聞き方をしており、98%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校は、生徒に、スクールカウンセラー(SC)やユースソーシャルワーカー(YSW)がどんな支援をしてくれるか理解させ、必要ときに役立てるよう促している。」という内容の質問に対して77.4%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ④ 「本校の荻窪カフェは、学校生活に新しい魅力を作り出している。」という内容の質問に対して57.1%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「本校の荻窪カフェは、学校生活に新しい魅力を作り出している。」という聞き方をしており、34.7%の教員が肯定的な回答をしている。荻窪カフェにはユースソーシャルワーカー(YSW)が常駐するなどしているが、「居場所」としては、不登校対応としての別所事業(本校ではアジールと呼称)や保健室の相談機能などと重複する面が見られ、今後更に内容精選と差別化を図る必要がありそうである。保護者アンケートでは「本校の荻窪カフェは、学校生活に新しい魅力を作り出している。」という内容の質問に対して67.7%の保護者が肯定的な回答をしている。

⑤特別活動・部活動

〈重点目標〉

ア 学校(年次)行事等の充実を図り意義のあるものとする。生徒会活動、部活動の年間指導計画の見直しと充実を図る。その上で、TOKYO ACTIVE PLAN for studentsを踏まえ、体育の授業と運動系部活動により、スポーツへの関心を高め、運動習慣を確立し、基礎体力の向上を図る。

イ 在り方・生き方について考えを深め、豊かな人間関係を育むために、全体計画に基づいた道徳教育を推進する。その基盤として年間指導計画に基づいたホームルーム指導を重視する。

ウ 生徒の主体的なボランティア精神や他者に貢献する意識と態度を育む。

〈方策〉

ア 感染症対策を行いながらもできる限り活動を行い、生徒の主体性と意欲を低下させない指導を行う。特に、運動系部活動において、体育の授業とともに基礎体力向上を図る。また、学校行事、部活動への参加率を高める。

イ 文化祭や芸術鑑賞教室を、生徒の「自他を大切にし協働して課題解決にあたる力や社会の正しいマナーの重要な育成機会」

と位置づけ、教員の適切な関与の下で生徒の自律的取組とできるように検討を進める。

ウ リサイクル活動、地域の公園清掃活動、震災避難所訓練等の地域と連携した活動を通して、生徒の主体的なボランティア精神や他者に貢献する意識と態度の形成につなげる。

【自己評価と課題及び改善策】

ア フルサイズの文化祭開催や、5つの部活動全国大会出場、生徒会役員が5年ぶりに定数充足するなど、生徒の活躍が光った1年となった。仲通商店街への全国大会横断幕の掲示や、商店への学校便りの配布を行った。

イ 学校行事では、他者との協働を通して自他を尊重する知識・態度を育成したり、教科指導においても全教科で授業規律を指導したり、例えば、地歴公民科で人間としての在り方や生き方、社会の仕組みについての理解と公正な判断力の育成、保健体育科では実技を通したルールの大切さを学ぶなど道徳教育・学校2020レガシー教育に取り組んだ。また、学校運営連絡協議会では、杉並区児童青少年センター（ゆう杉並）の利用者が倍増しているとの報告をいただいた。

ウ ボランティア活動に取り組む生徒が増えたり、文化祭の際に、生徒のホスピタリティにお褒めの言葉を数多くいただいたり、善行（高齢者の救助）により地域から感謝の連絡が入るなど、個々の生徒のボランティア精神が向上している。これらのことから、秀でた善行を表彰する校長賞を創設することとした。今年度は、この賞の創設のきっかけとなった行いを含め2件6名を表彰した。

【学校評価アンケート結果より】

特別活動について

① 「今年度は校歌を歌えるようになる指導を実施していますが、入学前と比べて、あなたは荻窪高校が好きになった。」という内容の質問に対して58.8%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「今年度は校歌を歌えるようになる指導を実施しています。一体感を高めるうえで効果がある。」という聞き方をしており、59.2%の教員が肯定的な回答をしている。

② 「あなたは現在部活動に所属していますか。」という内容の質問に対して「所属している（207名回答中53名）」、「所属していない（207名回答中154名）」の回答があった。

「所属している」と回答した生徒の内「部活動によって技量の向上ができて満足している」と回答した生徒は「4:23名、3:17名、2:8名、1:5名」、「部活動によって同好の生徒との親交が深められて満足している」と回答した生徒は「4:27名、3:14名、2:6名、1:6名」であった。

教員アンケートでは「本校の部活動は、生徒が技量の向上・同好の仲間との親交などで充実感・満足感が得られるよう配慮されている。」という聞き方をしており、67.4%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校の部活動は、生徒が技量の向上・同好の仲間との親交などで充実感・満足感が得られるよう配慮されている。」という内容の質問に対して73.3%の保護者が肯定的な回答をしている。

「所属していない」と回答した生徒の内「部活動をしない時間を、補習、個人的な技量向上、趣味に有効に使っている」と回答した生徒は「4:68名、3:49名、2:19名、1:15名」、「部活動をしない時間を、学外での交流に有効に使っている」と回答した生徒は「4:41名、3:52名、2:34名、1:24名」であった。

教員アンケートでは「本校では、HR・生徒会活動・生徒同士の交流などにおいて、生徒が満足できるような計画的・組織的指導がなされている。」という聞き方をしており、55.1%の教員が肯定的な回答をしている。保護者アンケートでは「本校の学校行事は、みんなで力をあわせたり折り合いをつけたりして、大切なものを作り上げていく資質の向上に役だっているように感じる。」という内容の質問に対して77.4%の保護者が肯定的な回答をしている。

⑥地域連携・広報活動

＜重点目標＞

ア 地域と連携し生徒の社会性を育むと共に、地域における学校理解や生徒理解を広げる。

イ 地域の人材や機関、教育施設等を積極的に活用する。

ウ 本校の取り組みを広く都民に発信し、特に、中学生とその保護者が確実に情報を取得し本校志願につなげられるようにする。

＜方策＞

ア 地域行事への参加やボランティア活動を推進するなどして、地域における学校理解や生徒理解を広げ、学校の教育活動の「見える化」を進めていく。

イ 学校2020レガシー、防災教育、キャリア教育、主権者教育、「人間と社会」を含む体験活動、日本語教育、進路行事等において地域や外部との連携を図る。

ウ 学校ホームページ、学校説明会、授業・行事公開等の充実を図り、学校の発信力を高める。個別の学校見学、進学相談等の希望に組織的に取り組む。また、Youtubeへの動画配信等のオンラインでの情報発信についても推進していく。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 桃井第二小震災救援所設営訓練での小中での共同作業や仲通商店街への全国大会横断幕の掲示、商店

への学校便りの配布等の取り組みにより、地域における学校理解や生徒理解を広げた。また、生徒会役員を中心に地域の行事にボランティアで参加したり、インターンシップも近隣地域に特化したかたちで再開した。実習においては企業の皆様にたくさんのサポートを受けながら全員が修了し、事後指導では活動報告もできた。これらは、本校生徒と地域の相互理解につながったと考える。課題はインターンシップ実施事業数が足りていないことである。そのため、次年度は近隣の教育機関と連携し、より多くの生徒の受け入れを計画していく。感染症拡大が沈静に向かっているため、さらに交流を広げていきたい。

イ 学校行事では、他者との協働を通して自他を尊重する知識・態度を育成したり、教科指導においても全教科で授業規律を指導したり、例えば、地歴公民科で人間としての在り方や生き方、社会の仕組みについての理解と公正な判断力の育成、保健体育科では実技を通したルールの大切さを学ぶなど道徳教育・学校 2020 レガシー教育に取り組んだ。また、学校運営連絡協議会では、杉並区児童青少年センター(ゆう杉並)の利用者が倍増しているとの報告をいただいた。

ウ 個別のケースに対応するため多人数を集めての学校説明会は控えたが、学校見学会、個別相談会を 4 回実施した。内容は少人数毎に、動画を使つての概要説明と校内見学及び個別相談で行ったため個別に丁寧な対応ができ、大会場での説明会よりもむしろ効果があったとも考えている。さらに、今年度は、事前予約制でⅠ部からⅢ部の授業公開を1回と2・3学期には月2回程度のⅢ部のみの学校見学会(OGIKOU NIGHT TOUR)を実施した。ホームページの更新は適宜行った。結果として、後期募集において昨年度のⅡ部に引き続き、今年度はⅠ・Ⅱ部で1倍を超えるなど、荻窪高校の特色が広く知られたうえで評価されている。

⑦その他

〈重点目標〉

ア 新教育課程を実施する中で、検証を進め必要に応じて改善を検討する。

イ 育児・介護のための時差勤務や短時間勤務等を取りやすい職場環境を作るなど、ライフ・ワーク・バランスを考慮した学校経営を行う。勤務時間外労働の適正化を含め「働き方改革」を進める。

ウ 学習指導、進路指導等への ICT 活用や広報活動のオンライン実施等、様々な教育活動及び学校運営において学校教育におけるデジタル技術活用を推進する。これにより、高度化する情報化社会を生き抜く力を培う。また、紙資源消費削減を目指す。

エ 全ての指導において、個に応じた指導方法を研究し、体罰によらない根気強い指導を実践していく。

オ 新型コロナウイルス感染症対策に伴う課題に対応する。

〈方策〉

ア 学校課題解決に必要な PT、WG を設置し、校内公募によりメンバーを決定する。

イ 業務の偏りや集中を避けるために各分掌の業務分担を検証し、必要に応じて整理すること等により業務の効率化を図り、休暇取得を促進するなどして月あたりの時間外労働が基準を超えないようにする。

ウ Office365、グループポータルなどの ICT を活用し、情報の共有・発信を効率的に行う。また、生徒への学習課題の配信など様々な場面で ICT の活用を推進する。これにより、高度化する情報化社会を生き抜く力を培う。また、紙資源消費削減を目指す。

エ 規範意識を高め服務事故を防止する。

オ 状況に応じて適切に対応する。

【自己評価と課題及び改善策】

ア 「荻窪高校に求められることを考えるプロジェクトチーム」を立上げ、今後、荻窪高校が取組むべきことについて検討した。本校は基礎基本を重視する学習内容になっており、進学希望者が一般受験するには授業の内容だけでは十分ではない。一般受験で進学を希望する生徒への学習指導を実施する体制を検討した。来年度は、これの具体化を検討していく。

イ 女性職員が妊娠出産休暇、育児休業、短時間勤務を取得するだけでなく、2 名の男性職員が育児休業取得するなど育児・介護に対応しやすい職場環境が構築されている。休暇取得促進については、8 月を強化月間として取り組んだ。年次有給休暇取得日数は平均 14.5 日/20 日、夏期休暇取得率は 100%、月 45 時間以上の時間外勤務は全体の 7.9%であった。今後も一層ライフ・ワーク・バランスを考慮した学校経営を行っていく。

ウ Office365 を活用し、生徒への学習課題の多くをオンライン配信している。また、教職員間では情報共有においてグループポータル、ファイルサーバー、メール等を活用している。分掌によっては部会の資料配布をオンライン化しペーパーレスで行ったり、あるいは、デスク配置を見直し、対面で即時打ち合わせができるようにするなど ICT の活用だけではない工夫により情報共有の適正化が図られた。結果的に、ペーパーレスも進み、学校全体の支出および業務量を削減している。今年度は、物価高により紙の価格が前年度までより1~2 割程度高騰しているなかで、紙にかかる費用が、令和4年度より 9%削減、令和 5 年度より 20%削減した。今後も物価高騰は避けられないことが予測されるため、更なるペーパーレスの推進が望まれる。

エ 職員会議等における研修等で、教職員の規範意識向上を図るとともに、調査書等の生徒の出願書類紛失を防ぐためのシステムを構築した。来年度は、これを他の機密書類を紙ベースで回覧しなくてはならない場合にも適用すべく検討していく。

【学校評価アンケート結果より】

- ① パソコンがいろいろな連絡に使用されているため、大事な情報を早く受け取れることが多い。」という内容の質問に対して 60.7%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「パソコンをいろいろな連絡に使用しているため、大事な情報を生徒たちに早く着実に伝達できていると思う。」という聞き方をしており、68.8%の教員が肯定的な回答をしている。この質問には生徒と教員の回答割合に差がみられるが、これはコンピュータ環境の差によるものと考えられる。教員は TAMS 端末が勤務中は起動状態にあるのに対し、生徒は自分のコンピュータを常に起動しているわけではないからである。生徒が主として使用しているスマートフォンとの連動が進めば、情報伝達の速度と確実性は向上すると考えられる。保護者アンケートでは「パソコンやスマホがいろいろな連絡に使用されているため、大事な情報を早く受け取れることが多い。」という内容の質問に対して 75%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ② 「本校の学習活動でパソコンやスマホを使用したことで、それらが自分の学習や将来に役立つ大切なものだと感じるようになった。」という内容の質問に対して 69.1%の生徒が肯定的な回答をしている。なお、この項目は教員アンケート、保護者アンケートにはない。
- ③ 「自分は、デジタル・コミュニケーションで特に大切なスキル(他者の人権に配慮するスキル、犯罪に巻き込まれないスキル、個人情報保護スキル)を身につけ、実際場面で活かしている。」という内容の質問に対して 65.7%の生徒が肯定的な回答をしている。教員アンケートでは「生徒たちは、デジタル・コミュニケーションで特に大切なスキル(他者の人権に配慮するスキル、犯罪に巻き込まれないスキル、個人情報保護スキル)を身につけ、実際場面で活かしている。」という聞き方をしており、36.7%の教員が肯定的な回答をしている。生徒の肯定的回答割合と教員の肯定的回答割合に大きな乖離がある。これは昨年と同様の乖離がみられたが解消には至っていない。今後の重点的な施策が望まれる項目である。保護者アンケートでは「うちの子は、デジタル・コミュニケーションで特に大切なスキル(他者の人権に配慮するスキル、犯罪に巻き込まれないスキル、個人情報保護スキル)を身につけ、実際場面で活かしている。」という内容の質問に対して 83.3%の保護者が肯定的な回答をしている。
- ④ 「育児又は介護のための時差通勤や育児短時間勤務等を取りやすい職場環境を作るなど、ライフ・ワーク・バランスの向上に配慮した学校経営を理解し、私も積極的に対応しようと努めている。」という内容の質問に対して 92%の教員が肯定的な回答をしている。
- ⑤ 私は、ライフ・ワーク・バランスを考慮したタイム・マネジメントのスキルが身についている。」という内容の質問に対して 71.4%の教員が肯定的な回答をしている。1/4 程度の教員がタイム・マネジメントが出来ていないこととなる。

○その他の数値目標

- ①履修した教科・科目について修得率を 85%以上とする。(99% ただし、未履修率が約 30%)
- ②進路の定まらない退学者数を10名未満とし、退学者総数を前年度より減らす。(退学者数 昨年度 33→今年度 46)
- ③全校生徒の遅刻数を前年度より減らす。(1 日当たりの 1 クラスの遅刻者数の平均 昨年度 1.9→今年度 2.2)
- ④英検や漢検等の各種検定試験の合格者数を前年度以上とする。(昨年度 167→今年度 234)
- ⑤第一希望進路実現を目指し、進路決定率 85%以上とする。(72%)
- ⑥各分掌は校内研修を年間3回以上実施する。(教務部 7 回 生活指導部 2 回 進路部 2 回 総合支援部 3 回)
- ⑦校内外への授業公開を 2 回以上実施する。
(校内外への授業公開 1 回、Ⅲ部学校見学 5 回、その他(授業力向上委員会、年次研修の研究授業等))
- ⑧全教員が他の教員の授業見学を3回以上行う。(実施できた。)
- ⑨Ⅰ・Ⅱ部の応募倍率を 1.0 以上とする。(応募倍率 前期Ⅰ部 0.90 Ⅱ部 0.61 後期Ⅰ部 1.2 Ⅱ部 1.09)
- ⑩長期休業日中等の講習・補習を、延べ 50 講座以上実施する。(夏期講習 12 講座延べ 190 回)
- ⑪月 45 時間以上の時間外労働の教員の割合を 8%以下にする。(7.9%)
- ⑫全教員が授業での生徒の ICT 端末を活用した授業等を 1 講座につき月あたり 1 回以上行う。
(1・2 年次は約割、3・4 年次以上は約割の講座で実施)
- ⑬支援方針会議を 25 回以上行う。(26 回実施)
- ⑭全教員による生徒情報共有の会議を 3 回以上行う。
(全体ケース会を「特別支援」、「外部連携」、「不登校対応」とテーマをもって実施した。)
- ⑮部活動への参加率を前年度より増加させる。(昨年度 33%→今年度 27%)